

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：32629

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780481

研究課題名(和文)近代日本の少年少女雑誌と作文教育のセンチメンタリズムとジェンダーに関する研究

研究課題名(英文) the research on sentimentalism and gender of the boy's and girl's magazines and the composition in prewar Japan

研究代表者

今田 絵里香 (IMADA, ERIKA)

成蹊大学・文学部・准教授

研究者番号：50536589

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：1900～1910年代の『日本少年』『少女の友』においては投稿文化が盛んであった。『日本少年』の投稿は、男子投稿者によって、名誉に繋がるものとしてとらえられていた。そこでは、国家の有用な人間になることと、詩文に秀でた人間になることが、一致してとらえられていた。一方、『少女の友』の投稿は、女子投稿者によって、投稿者同士の交際に不可欠なものとしてとらえられていた。女子の場合、文芸作品の掲載は、学校において批判されることがあった。よって、女子は本名を隠し、雑誌の上だけで称賛されることを目指した。『少女の友』では、常連投稿者は、投稿者にも編集者にもスター扱いされ、大勢の支持者を獲得していた。

研究成果の概要(英文)：From the 1900s through the 1910s, correspondence culture bloomed in the magazines Nihon Shonen and Shojo no Tomo. The young men contributing to Nihon Shonen were in search of prestige. It was thought that becoming skilled in literature and becoming a good servant for the nation were one and the same.

For young girls contributing to Shojo no Tomo on the other hand, the companionship with other contributors was essential. In the case of girls, schools criticized the publication of their literary works. Therefore, female contributors hid their real names and only aimed at receiving praise within the magazine. In Shojo no Tomo, regular contributors gained many supporters and both editors and other contributors and treated them as celebrities.

研究分野：社会科学

キーワード：少年雑誌 少女雑誌 作文教育 投稿文化 ジェンダー メディア

1. 研究開始当初の背景

近代日本における男子/女子の「文章を書く文化」は、第一に中学校/高等女学校の作文として、第二に少年/少女雑誌の文芸として推進されてきた。このうち、後者においては、1930年代になると、「文章を書く文化」=「美とセンチメンタリズムを特徴とする美文を書く文化」=「少女文化」という枠組みが示されるようになる(今田絵里香「少年雑誌におけるセンチメンタリズムの排除 1930年代の『日本少年』・『少女の友』投稿欄の比較から」『女性学』第11号、86-106頁、2004年)。さらに、総力戦に突入すると、その「少女文化」は「総力戦にふさわしくない文化」として激しい批判にさらされるようになる(同)。

しかし、少年/少女雑誌の生まれた1900、1910年代に遡ってみると、少年/少女雑誌においては、「文章を書く文化」=「美とセンチメンタリズムを特徴とする美文を書く文化」=「少年文化」という枠組みが強固に存在していた。『日本少年』1910年1月号の作文投稿数、2万19通という数は、少年たちがいかに美文を操ることに熱中し、いかに「文章を書く文化」に没入していたかを示している。そもそも、近世の日本においては、「文章を書く文化」=「漢詩文を書く文化」=「少年文化」(エリート少年文化)という枠組みが存在していたといわれている。このことを踏まえると、このような近世日本の文化が、1900、1910年代の少年雑誌の投稿文化にまで引き継がれていると考えることもできよう。そうであるとすると、いったいどのようにして、「文章を書く文化」=「美とセンチメンタリズムを特徴とする美文を書く文化」は、「少年文化」から離れ、「少女文化」へ移っていったのであろうか。本研究は、この問いに取り組むことを目的としている。

2. 研究の目的

本研究は、近代日本における少年/少女雑誌の文芸、および中学校/高等女学校の作文に焦点を当て、その「文章を書く文化」におけるセンチメンタリズムと「少年」/「少女」というジェンダーの関係を解き明かすことを目的としている。「文章を書く文化」において、「少女」に関連する少女詩・少女小説は、抒情詩・抒情小説と読みかえられ、センチメンタルなものとされてきた。一方、「少年」に関連する少年詩・少年小説は、センチメンタリズムと相反するものとされてきた。本研究は、このような枠組みがどのようにして生まれたのか、少年/少女雑誌の文芸、中学校/高等女学校の作文を男女で比較することによって、解き明かしていきたい。

3. 研究の方法

少年/少女雑誌の文芸、および、中学校/高等女学校の作文に着目する。具体的な作業として、少年/少女雑誌の投稿欄における

創作指導の内実、少年/少女雑誌の投稿欄に投稿していた男子/女子の投稿文化、中学校/高等女学校の作文教育の内実、男子/女子の作文教育の受容、中学校/高等女学校の作文と少年少女雑誌の文芸の関係、以上の5点を明らかにする。については、投稿欄に力を入れていた『日本少年』『少女の友』(実業之日本社)を中心に投稿欄を分析することにする。一方、に關しては、当時使われていた作文教科書、男女知識人の書き残した文書を中心に分析することとした。最後に、は、の史料を組み合わせることにする。分析する期間は1900年~1945年である。始点を少年/少女雑誌が生まれた1910年代、終点を総力戦終結の年と設定したためである。

4. 研究成果

本研究の目的は、中学生と女学生の投書文化を比較することである。この目的を果たすために、中学生と女学生を主な読者とした少年少女雑誌『日本少年』と『少女の友』の投書文化を、1900~1910年代に限定して比較することにする(『日本少年』は1906〔明治39〕~1919〔大正8〕年、『少女の友』は1908〔明治41〕~1919〔大正8〕年)。

投書文化とは何か。「投書」はメディアに文芸作品を投稿することである。投書は、戦前日本ではよく行われ、特に少年少女の間では一つの文化になり得る規模で盛んに行われていた。これを「投書文化」と呼ぶことにしたい。

最初に投書文化を盛んにさせたのは、少年少女向け投書雑誌であった。代表的な雑誌は、週刊投書雑誌『穎才新誌』(製紙分社、1877〔明治10〕年3月10日創刊)である。この雑誌は、全国規模型少年少女向け雑誌の元祖と言われている。このことは着目に値する。少年少女向け雑誌というジャンルの形成を促すほどに、当時、投書に熱中する少年少女読者の層が厚みを持っていたと見なせるからである。さらに、その層は、『穎才新誌』を発行部数を増大させるほどに、巨大な厚みを持った層だった。理由は、それが小・中学校の作文教育に用いられ、明治普通文体(漢字片仮名交りの漢文訓読体)を学ぶ模範文例集となったことにある。

当時、作文教育においては、児童・生徒に模範文を丸ごと覚えさせ、覚えた言い回しを使って文を書かせるということが行われていた。これは、1872(明治5)年から1898(明治31)年にかけて勢力を持った「名文暗誦主義作文教授法」という教授法で、漢詩文・模範文の定型を暗記させ、その定型を用いて文章を書かせるというものであった。それが勢力を持ち得た社会背景には、漢詩文・模範文を操ることが、近世には武士の教養、明治初期には学歴エリートの教養として捉えられていたことがある。

このように、少年少女の投書文化は、1877

(明治10)年から1900(明治33)年前後まで、学校教育と運動しつつ、投書雑誌を舞台にして大きな盛り上がりを見せた。

『穎才新誌』廃刊後の1900(明治33)年前後、今度は複数の少年少女雑誌が刊行され、引き続き少年少女の投書文化を盛り上げていった。投書文化は少年少女雑誌にその舞台を移したのである。その中で、『日本少年』は1906(明治39)年1月、『少女の友』はその2年後の1908(明治41)年2月に、共に実業之日本社から創刊された。どちらも投書欄の充実を謳い、実際に多数の投書が殺到した。とは言え、少年少女雑誌は投書雑誌とは異なる。多数の頁数を割いているのは少年少女小説である。それゆえ、小・中学校の作文教育に用いられることは稀であった。にもかかわらず、1900~1910年代、読者の投書は途絶えることがなかった。『日本少年』と『少女の友』が、数10万という発行部数を叩き出していたことが、その何よりの証拠であろう。

『日本少年』『少女の友』の投書文化を比較した結果、以下のことが明らかになった。1900~1910年代の『日本少年』と『少女の友』において、読者である男子・女子は、文芸欄と通信欄に文芸作品を盛んに投書していた。この投書を、『日本少年』の男子投稿者は、名誉に繋がるものと考えていた。なぜなら、文芸作品が掲載されれば、雑誌上においてはもちろん、学校、家庭においても称賛されるからである。そこでは、国家の有用な人間になることと、詩文に秀でた人間になることが、一致して捉えられていた。

一方、『少女の友』の女子投稿者は、投書を投稿者同士の交際に不可欠なものとして捉えていた。女子の場合、文芸作品の掲載が、雑誌上、家庭、学校で称賛されることもあったが、学校では批判されることもあった。なぜなら、詩文を作ることに秀でた人間になることは、男子の目指す人間、つまり国家の有用な人間になること、ひいては男子化することと考えられていたからである。よって、女子は本名を隠し、雑誌の上だけで称賛されることを目指した。『少女の友』では、常連投稿者は投稿者にも編集者にもスター扱いされ、大勢の支持者を獲得していたのであった。

このような違いを、どう考えたらよいのだろうか。男子は、女子に比べると高等教育機関に進学する者が多いことから、学校生活が長期にわたることになった。また、学校生活の付き合いは、時にそのまま職業生活の付き合いに繋がるがあった。そのため、学校生活における付き合いを重視せざるを得ない。逆に、女子は、中等教育機関が最終学歴になる者が多いことから、学校生活に限られていた。そして、学校での付き合いが、学校を出たあとの付き合いに繋がることは稀であった。だからこそ、雑誌における付き合いに執着したのではないかと考えることができる。

編集者は、『日本少年』においても『少女の友』においても、第一に写生主義、第二に童心主義を掲げて、指導にあたっていた。前者の背景にあったのは、文壇における写生主義の勢力拡大であり、後者の背景にあったのは、都市新中間層の量的拡大である。この指導においては、「定型でない作品」が称揚されていた。

ところが、1911(明治44)年11月号以降、『日本少年』においては、学校関係者である芦田恵之助と倉田浜荻が選者になった。このことによって、文芸欄の作文においては、私の世界を語る作文が雑誌作文と名づけられ、「少年らしくない作文」として決めつけられ、排除されていった。同時に、公の世界を語る作文が学校作文と名づけられ、「少年らしい作文」とされ、称揚されていった。

このような『日本少年』における変化を、どのように捉えたらいいのだろうか。『日本少年』においては、芦田が選者になるまで、国家の有用な人間になることと、詩文に秀でた人間になることが一致していた。すなわち、公の世界の人間になることと、私の世界の詩文に秀でた人間になることが、表裏一体のものとして認識されていたのである。しかし、芦田が選者になったあと、その結びつきが失われていった。このような変化は、選者ただ一人の力で引き起こされたものというより、その背後の作文教育の変化が後押ししたものと考えたほうがよいであろう。

作文教育においては、名文暗誦主義作文教授法が衰退し、随意選題主義作文教授法と、自由選題主義作文教授法が拡大していた。この変化の中で、「ありのままを書いた作文」が称揚されていた。しかし、どのような作文が「ありのままを書いた作文」なのか、どのような作文が「ありのままを書いた作文」でないのか、はっきりしない。そうすると、大人が既存の規範を用いながら、子どもの作文を「ありのままを書いた作文」か「ありのままを書いた作文」でないのか、分類するしかない。そして、その時に用いられた規範の中に、ジェンダー規範があったのである。

大人が、ジェンダー規範を用いて分類する中で、私の世界を語る作文が、「少年らしくない作文」「ありのままを書いていない作文」に分類され、批判されていった。一方、公の世界を語る作文は、「少年らしい作文」「ありのままを書いた作文」に分類され、称揚されていった。

こうなると、『日本少年』の男子投稿者は、私の世界を語る作文を書くことから手を引かざるを得ない。なぜなら、第一に、私の世界を語る作文を書くことは、「少年らしさ」から逸脱することになるからである。第二に、公の世界を語る作文が学校作文と名づけられ、学校において勢力を持つようになる一方で、私の世界を語る作文が雑誌作文と名づけられ、学校において勢力を失うようになると、どれほど私の世界を語る作文が上達しよう

とも、もはや学校において称賛されることはなくなるからである。『日本少年』の男子投稿者は、投書を何より、名誉に繋がるものとして捉えている。とするなら、学校における名誉に繋がらない作文は、男子投稿者に忌避されるようになって考えられる。

一方、『少女の友』の女子投稿者は、私の世界を語る作文を書くことをやめなかった。なぜなら、第一に、私の世界を語る作文に秀でることが、「女らしさ」に合致すると見なされるなら、むしろ私の世界を語る作文を書くことは、称賛されるべきであって、ますます推進されると考えられるからである。第二に、女子投稿者にとっては、そもそも投書が学校における名誉と結びついているわけではなかったため、学校において、公の世界を語る作文が勢力を持つようになると、私の世界を語る作文が勢力を失おうと、女子投稿者には何ら影響を及ぼさなかったと考えられるからである。

ところで、女子が作文を書いただけ、あるいはまた、作文が上達しただけで、男子化したと捉えられるなんて、何と大げさな反応であろうと、驚かれるかもしれない。しかし、当時の作文教育を思い起こしてもらいたいのである。先に見たように、芦田が現れるまで、模範文を暗記してそれを使って文を書くという、名文暗誦主義の作文教育が行われていた。それは、言うならば、男性作家の文体を模倣し、男性作家の思想を頭に叩き込んで、それをそっくりそのまま使って文を書くということである。

おそらく、その男性作家の頂点にいたのは孔子や孟子などの中国の男性思想家たちであろう。このような男性思想家の文体と思想の枠組みを使って文を書いていたのである。これを男性化と言わずして何と言おうか。すなわち、名文暗誦主義の作文教育とは、男女を男性知識人化する教育だったのである。

実際のところ、芦田が選者になる前、『日本少年』と『少女の友』の投稿作文に、男女の区別はほとんど見られない。名文暗誦主義の作文教育の下で作文を書いていた少年少女の文章は、当然のことながら、「男性知識人らしい文章」ばかりであったのである。これを編集者は批判していた。もっと「男性知識人らしくない文章」、すなわち「新しい文章」を書くことを望んでいたのである。そして、芦田が作文教育界と『日本少年』に現れて、男子に「男子らしい文章」、女子に「女子らしい文章」を書かせるようになった。そう考えると、「随意選題」「自由選題」の作文教育は、男女を「男性知識人化」する教育ではなく、男子を「男子らしく」、女子を「女子らしく」する契機を孕んだ教育であったと考えることができる。

まとめるなら、投書文化は二重の意味でジェンダー化されたと言える。一つに、投稿者によって、投書行為の目的が少年にとっては名誉に、少女にとっては交際にあるとして、

意味づけられた。二つに、編集者と選者によって、少年は公の世界をテーマにした作文を書くことがふさわしいと価値づけられた。二つのジェンダー化は、前者のジェンダー化が後者のジェンダー化を後押しするかたちで、関連し合っていた。つまり、少年が学校における名誉を得ようとしたからこそ、いち早く私の世界をテーマにした作文を捨て去ることになったのである。

このように、二つのジェンダー化が絡み合うことで、『日本少年』においては、私の世界を語る作文が衰退し、公の世界を語る作文が増加していった。一方、『少女の友』においては、私の世界を語る作文はますます人気を獲得していった。

このような動きによって、少年はもっぱら公の世界をテーマにした作文を書くことになった。このような作文を書くことは、ソシユールの言うように、少年にその作文の枠組みで世界を把握させていくことに繋がっていった。また、少女は私の世界をテーマにした作文を書き続けることになった。少女においても、このような作文を書くことは、その作文の枠組みで世界を切り取らせていくことになった。書くという行為が「少年らしい行為」と「少女らしい行為」に分断され、少年と少女はその行為を通して、「少年らしい世界」と「少女らしい世界」をそれぞれ構築していくことになったのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

今田絵里香「ジュニア小説における性愛という問題」『成蹊大学文学部紀要』第52号、査読無、2017年、23-46頁。

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計8件)

本田由紀・中村高康編『教育社会学のフロンティア1 学問としての展開と課題』(今田絵里香「教育社会学と歴史研究 移動・選抜、社会史、ジェンダー史の観点から」165-186頁)岩波書店、共著、2017年、323頁。

成蹊大学文学部学会編『文化現象としての恋愛とイデオロギー』(今田絵里香「ジュニア小説における純愛という規範」35-79頁)風間書房、共著、2016年、328頁。

西村大志・松浦雄介『映画は社会学する』(今田絵里香「親密性(A.ギデンズ)」111-122頁)法律文化社、共著、2016年、256頁。

成蹊大学文学部学会編『ダイナミズムとしてのジェンダー 歴史から現在を見るころみ』(今田絵里香「『日本少年』の理想像の変遷 抒情の排除と学歴の価値の希薄化」1-32頁)風間書房、共著、2016年、236

頁。

小山静子編『男女別学の時代 戦前期中
等教育のジェンダー比較』(今田絵里香「少
年少女の投書文化のジェンダー比較
1900～1910年代の『日本少年』『少女の友』
分析を通して」209-252頁)柏書房、共著、
2015年、312頁。

山田昌弘・小林盾編『ライフスタイルとラ
イフコース データで読む現代社会』(今
田絵里香「雑誌」71-77頁)新曜社、共著、
2015年、219頁。

成蹊大学文学部学会編『データで読む日本
文化 高校生からの文学・社会学・メディ
ア研究入門』(今田絵里香「スター どの
ようなスター像が作られてきたのか メデ
ィア研究アプローチ」67-93頁)風間書房、
共著、2015年、171頁。

小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セ
クシュアリティの戦後史』(今田絵里香「異
性愛文化としての少女雑誌文化の誕生」
57-77頁)京都大学学術出版会、編著、2014
年、348頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

研究組織

(1)研究代表者

今田 絵里香 (IMADA, Erika)

成蹊大学・文学部・准教授

研究者番号：50536589